

文樂評切拔帳 (五月)

文樂本領を發揮す

絶品古靱の「岡崎」

山口 廣 一

□…近來、とかく低調を囀り勝ちの文樂も、この月ばかりは久し振りに文樂の文樂たる本領を心ゆくばかり發揮した古靱の「岡崎」が正に當代の絶品と推稱出来るからである

□…古靱の「岡崎」は辨天座時代の初演から今度で確か第四回目の上演だと思ふが、作品に對する解釋もこの人だけに何處までも正しく語り口にもいよいよ圓熟さを加へて來た

□…雪の夜に聞く糸織唄の蕭々たる抒情味から「必ず死ぬな」の悲痛さ「嬉しき昂じて足立たず」あたりの表現の力強さと面白さに至つては、まことに渾然たる藝格を示す、欲には幸兵衛に多少の注文は残つたが、まづこれだけの「岡崎」は他に求むべくもない

□…勿論、この成功は單に古靱のみに歸すべ

きでなく榮三の政右衛門の立派さ、門造の幸兵衛、文五郎のお谷とともに人形の構圖的な美しさにも手腕が光る

□…ただし、この「岡崎」は所演時間二時間以上かかる、そのため次ぎの「堀川」には原型を止めぬまで支離滅裂の省筆が加へられてしまつてゐる、これでは相生太夫以下の出演者がむしろ大きい被害者である、折角の「岡崎」だが、かうした矛盾は今後なんとか考慮さるべきであらう。

—毎日新聞—

古靱に献言

文樂の伊賀越岡崎

◇…文樂五月夜の部第一「紅葉狩」は新曲、「辰橋」と同工異曲で紋十郎の更科姫實は悪鬼が柔と剛を違ひ分けるのがみもの、伊達の更科姫は若い艶やかさありてこの人の藝質を感じる、濱の維茂はただ綺麗事に終るが不満

藝界展望

東上の文樂座 七月一日より新橋演舞場に出演

◇第一回(一日より五日)

「國姓爺合戦」仙壇女道行の段(呂一相生、南部一伊達、一日替り、濱外、仙糸一吉五郎、喜左衛門一重造、一日替り團六、友衛門一松之輔、一日替り)樓門之段(南部、重造一伊達、喜左衛門、一日替り)獅子ヶ城之段(切、大隅、清二郎)紅流しの段(相生、吉五郎一呂、仙糸、一日替り)菅原傳授手習鑑(寺子屋之段(中、雛、燕三)つばめ、錦糸、一日替り、切、古靱、清六)「生寫朝顔日記」宿屋之段(駒澤、織、朝顔南部一伊達、一日替り、岩代、七五三、徳右衛門、相生一呂、一日替り、觀西翁、琴勝太郎)大井川之段(松、友衛門一松之輔、一日替り)人形一松王(榮三)和藤内母、千代(文五郎)錦祥女、朝顔(紋十郎)和藤内(玉助)甘輝(門造)源藏(龜松)住吉大海童子、駒澤(光造)戸浪(榮三郎)

◆「伊賀越道中双六」の新關は病氣全快の綱造が久々で出演、だが豪快な絃を十分聴けず七五三が奴助平でちやり場を懸命に語つてゐるのが印象に残る。

◆「竹藪」の松島は「岡崎」の中の隅若と共に筋をつなぐのみ、次の呂は前半がよく後半はこの人の癖である難解な淨瑠璃に墮した。

◆切は古靱であるが、古靱の岡崎は極めて既に定評のあるものだけに立派で前月と共に文樂を一人で背負つてゐる形で紋下らしい雄々しさである「既にその夜もしんしんと遠山寺に告げ渡る……」の最初に先月同様この一篇を貫く雰圍氣の構成が見事でお谷の登場による哀痛さにかみ合ひ、政右衛門の悲壯さが次第に鮮明に浮き彫られて武人の背負へる現實的宿命が痛々しいまでに悲壯美を描出し堂々たる語り物である。

◆然しさうした立派さの中にやはり一脈の不滿を感じるのは思ひ入れが多く長い事と屢々人形を見ることである、紋下ともあらうものなさぬことでもある。

◆人形では榮三の政右衛門が輪郭の大きさと格調の正しさの他内面性の描出に成功し、文五郎のお谷の潤ひと氣品の醸し出す深い心

理美の流露と共に斷然群を抜いて光芒を放つ
◆「近頃河原連引」堀川猿廻しは相生、南部つばめ、呂賀、呂の掛合でつばめの傳兵衛は貧弱だが呂賀が中堅に混じつて些かの遜色なきは偉とするに足る。

◆若手で一番成長の樂しめる呂賀の勉強を新つてやまぬ、相生の與次郎、南部のおしゅん共に懸命なのが印象に残り、觀西翁のいづもながらの艶やかな絃と元氣を喜ぶ、人形は紋十郎のおしゅんが艶麗で愁があり技巧本位に墮さぬが良し。
—大阪新聞—

關西劇信の一節

竹屋治三郎

◆文樂座 海軍記念日に因んで「水漬く屍」の再演、又夜の部には「紅葉狩」の再演が出てゐる、再演とは云ひ乍ら新作物で「水漬く屍」は主題は結構だがまだ十分こなされてゐない。

「紅葉狩」は振りもよく付いてゐるし紋十郎の更科姫の繊細な技巧は名人文五郎の後継者として恥しからぬ演技を見せてゐる。

今月は晝夜を通じて矢張り紋下古靱の岡崎

◆第二回（六日より十日）

「伽羅先代萩」竹の間之段（八沙、七五三、沖の井、つばめ、政岡、雛外、綱造）御殿之段（呂、仙糸—伊達、喜左衛門、一日替り）政岡忠義之段（松、觀西翁）伊勢音頭戀寝丸（古市油屋十人斬之段（中、呂、仙糸—伊達、喜左衛門、一日替り、切、古靱清六）「赤道祭」（シテ、大隅、ワキ、相生—織一日替り、ツレ、濱外、清二郎外）繪本太功記「尼ヶ崎之段（前、南部、重造、後、相生、吉五郎—織、團一日替り）人形二貢（榮三）萬野、操（文五郎）政岡、赤道神（紋十郎）喜助、光秀（玉助）おこん艦長（光造）榮御前、重次郎（龜松）貢伯母、さつき（小兵吉）初菊（榮三郎）

◆第三回（十一日より十五日）

「久米仙人吉野花王」吉野山之段（花増、南部—伊達一日替り、久米王、七五三外、綱造外）「水漬く屍」（織、團六外）攝州合邦辻（合邦住家之段（中、雛—つばめ一日替り、友衛門、切古靱、清六）「一谷嫩軍記」熊谷物語之段（相生、吉五郎—呂、仙糸一日替り）首實檢之段（切、大隅、清二郎）「新版歌祭文」野崎村之段（久作、相生—呂

が三拍手揃つての壓巻である。——東京新聞——

六 月

順風の文樂座

「朝顔日記」と「壺坂」

山口 廣 一

□…今月の文樂座では壺の部に「朝顔日記」が比較的丁寧な通し狂言として出てゐる、この狂言をこれだけ丁寧に扱つたのは辨天座時代の昭和二年三月以來の記録である、もつとも最後の「大井川」を中断させてゐるなどは困るが、この點を除くと企畫的にも立派だし興趣もあり、まづ文樂はこの月も順風に帆をあげた形である。

□…各段中では七五三太夫の「笑葉」が問題だが、總體に口捌きが重苦しく熱演の割には引立たず、逃げる駒太夫あたりの佳品をそぞろ追憶させるにとどまつた、なほ餘談だがこの「笑葉」では玉助の遣つてゐる萩野祐仙のカシラが文樂現存カシラ中での逸作である、鑑賞を忘るべきでない。

□…壺の部に比べると夜の部はかなり低調、

ただそのうちでは呂賀から改名した松太夫の「壺坂」が案外の拾ひ物である、然もこの新進に配するに古老道八の紋をもつてしたのは異数の優遇だが、その優遇に應へて、この「壺坂」は甚だ異色の出来栄を示した、即ち最初の語出しの地唄からすでに道八の薫陶ぶりが窺はれ、加ふるに松太夫の精一杯の力を精一杯に盡みかけて行く語り口が未完成ながらの魅力であり、あの聲量も頼もしいだけに、これでアクの強さが抜けて來れば十分の將來性を持つてであらう、とにかく夜の部では皮肉でなく紋下古軋の「葛の葉」あたりよりもむしろこの新進の「壺坂」に興味の中心があつた

——毎日新聞——

關西劇信の一節

升尾治三郎

◇…文樂座の六月は本格興行で壺は「生寫朝顔日記」の通し、宇治川から大井川迄、太夫は二三中堅處が入つた若手獎勵劇。さてかうして通しで見ると相當名作視？されてゐる「朝顔日記」も物語の興味は人情噺乃至諷刺の味で總體に決して優秀作とは云へまい。南部

一日替り、お光、南部—伊達一日替り、お染、松、久松、宮—越名、一日替り外、觀西翁—お染は船、久松堤（相生—呂一日替り、南部—伊達一日替り外、仙糸—吉五郎外）人形—合邦（榮三）玉手御前（文五郎）相模、お光（紋十郎）合邦女房、久作（政龜）熊谷（玉助）彌陀六（門造）

◇第四回（十六日より廿日）

情報局國民演劇參加「義經千本櫻」伏見稻荷森靜別れ之段（義經、七五三、靜、雛、忠信、濱外、綱造）嵯峨庵室之段（中、宮—越名一日替り、錦糸、後、相生、吉五郎）椎の木之段（口、つばめ、仙三郎、奥、大隅、清二郎）小金吾討死之段（呂、仙糸）釣瓶壽し屋之段（切、古軋、清六）道行初番旅（靜、伊達、忠信、松外、觀西翁、喜左衛門外）川連法眼館之段（中、南部、重造、織、團六、ツレ、燕三、勝太郎）人形—壽し屋の權太、道行の忠信（榮三）靜（文五郎）小金吾、お里（紋十郎）彌左衛門（政龜）盛久、覺時（門造）彌左衛門女房（小兵吉）稻荷の森、川連館の忠信（玉助）椎の木の權太（光造）義經、彌助（龜松）

◇第五回（廿一日より廿五日まで）

太夫の宿屋は歴巻、七五三太夫の笑樂の段も上出来。

夜の「赤道神」は新作謡曲「皇軍艦」の浮曲化だが作が充分消化されてゐない、紋十郎の赤道神の振事は見事だつた。

紋下古親太夫は「葛の葉子別れ」を語り哀切極まりなき物語に嘸り泣く聲さへ聞えた、榮三は「葛の葉」を使ひ鮮な早替りに名人の冴えを見せた。切に呂賀太夫改め松太夫が「壺坂」を九ごかしで語つてゐるが成る程最後迄一糸亂れぬ聲量の豊さを示したがまだ語り口に艶がない。

かうした天性を持つてゐるものを完全に成長させるのには先づ周囲の理解が必要だ。餘りに賞めそやして變形達人を愼へてはならない。その成長を充分長い目で見てやり實力以上の負擔をさせる事は勿論練成上必要だが悪くすると嫩の内に枯れさせて了ふ危険なきにしもあらずだ。戒心すべき事である。

—東京新聞—

六月の文樂

「先代萩」では文五郎の政岡が技巧のありたけを盡くす感じで、歌舞伎ではもう見られぬ

貴重なものがあるが、恐らく文五郎としてもそれほどの會心の作ではあるまい。それよりも「葛の葉子別れ」で保名を實に艶かな二枚目に演出してゐるのが注目される。近頃としては兩巨頭が男女の役を取替へた形だが、榮三の女形よりは子への愛情を出すところ、狐といふことなどは、もはや問題でなく、古親の唄つて唄はぬ處さとともに悲痛な母性愛を一層深くする。新作「赤道祭」は觀世流謡曲「皇軍艦」と同じ原作によつたもの、艦長らの扮装を上古の武人にしたのは思ひつきだが、シテの赤道神が狩衣姿なのとよく合はない。後は紋十郎のシテの獨舞臺だが、案外感銘は淺く、床も大隅らに十分語らせる所なかつたのは遺憾であつた。臺の「朝顔日記」通しは舞臺も面白く、相生の濱松小屋、七五三の笑ひ樂、織の奥座敷など床の佳作が續いたのは特筆すべきであらう。K

—朝日新聞—

正 誤 表

第四百二十號

頁 段 行

誤

表

四 下 一六 寶曆十二年 寶曆十一年

七 上 一〇 中諸乙子願見世

中諸乙子願見世

七 下 二一

無宿園七時雨傘

宿無園七時雨傘

「本朝廿四孝」「偲ぶ佛」「双蝶々曲輪日記」引窓「御所櫻堀川夜討」「壺坂」

◆第六回(廿六日より卅日まで)

「宵枕樓」「和田合戦女舞鶴」「近頃河原達引」「増補忠臣蔵」「關取千兩轡」

◆第七回(卅一日より八月四日)

「假名手本忠臣蔵」下馬先進物より一力茶屋まで

◆……東京歌舞伎座 七月三日初日「妹背山婦女庭訓」「素襖落」長谷川伸作「一本刀土俵入」「玉屋」菊五郎、友右衛門、喜多村

◆……明治座 二日切日「御目見得だんまり」

永田衛吉作「赤穂義士審判」「道行初音旅」文樂座特別出演、木村錦花作「東海道中膝栗毛」沼津松原より熱田芝居小屋迄、狼之助壽美藏

◆……關西歌舞伎、移動演劇に參加(第一班)

「石切棍郎」「道行初音旅」額田六福作「羅夜河岸」中村魁車班と市川小太夫の厚生劇班との合同、七月二日より三日間呉に開催

「第二班」「繪本太功記」尼ヶ崎、郷田憲作「天野屋利兵衛」岡村柿紅作「茶壺」阪東壽三郎班に坂東義助、中村霞仙加入、十四日より四日間豊川に開催

「第三班」「伽羅先代萩」「操三番叟」中村梅玉班、十四日より五日間、八幡に開催。